

バイオガス発電所の完成イメージ図(アステック提供)



年間で2100世帯分相当  
残りかすは肥料に活用



豊岡市でのバイオガス発電計画を説明するアステックの  
小林篤史さん＝姫路市実法寺

# 姫路の水処理会社アステック 豊岡でバイオガス発電

食品廃棄物を発酵させて生じたバイオガスを燃料とする発電所を、姫路市実法寺の水処理会社「アステック」が来年3月から、豊岡市日高町で建設する。年間発電量は一般家庭約2100世帯分の約985万キロワット時になる見通し。消化液と呼ばれる発酵の残りかすには窒素やカリが含まれ、有機肥料として地域の田畑で活用する。

(田中宏樹)

同社が2020年度から県内を中心に建設地を検討し、日高町山宮の農地だった土地約8200平方メートルを選定。22年6月に地元の同意を得た。同社の100%子会社「豊岡バイオガスエナジー」が発電

を担い、固定価格買い取り制度(FIT)で売電する。総事業費は約40億円。資金はみなと銀行(神戸市)や但馬銀行(豊岡市)など八つの金融機関が協調し、環境に配慮した事業に使用

を限定した「グリーンローン」として融資する。発電所では固形、液体を合わせて1日約130トンの食品廃棄物を処理できる。アステックが県内や近隣府県の食品工場から排出される野菜のくずや皮といった

廃棄物のほか、売れ残った商品などを収集。高さ21メートルの円柱形の専用タンクで発酵させ、バイオガスを製造する。消化液は希望する農家の田畑まで運搬し、散布する。余った消化液は同社の技術を生かして浄化し、排水するという。

同社は発電所の稼働により、廃棄物の焼却などで生じる二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の排出量を年間約3千トン削減できると想定する。

宮西賢一社長(42)は「食品ロスやごみの問題解決につなげ、地域の活性化にも貢献できる取り組みとした」と話した。